

会 長 あ い さ つ



日本WHO協会会長

中野 種一郎

アジアにおける初めての万国博が、わが国において現在行なわれており、世界の77ヵ国が参加して文化のオリンピックとも称せられる世紀の博覧会が厳粛に、かつ盛大に举行されたことは、これひとえに、世界中の人々が、お互いに手をたずさえ、健康であることは世界の平和と安全を達成する基礎であるというWHO憲章の趣旨を端的に表わしているものと信じます。

ご存知のごとく、WHOには国の大小を問わず、世界131ヵ国が加盟し、それぞれの国民所得、人口などを基礎にし、WHO独自の比率をもってWHO事業予算の経費総額から割り出した分担金を拠出しています。そしてそれぞれの立場において寄与、または援助を受け、健康とは完全な肉体的精神のおよび社会的福祉の状態であり、単に疾病または病弱の存在しないことではないという線に到達するべく努力を続けています。

WHOは本年の第22回世界保健デーにあたり、世界各国共通の主題として、“ガンの早期発見は生命を救う”という標語の下にガンの問題を採択しましたが、ガンの前ぶれとなる次の7つの症状を覚え、これらの症状のうち、どれかが2週間以上続いたら、すぐ医師に相談して、“ガン検診受けて安心明るいくらし”の標語（日本）の下に恐怖、無知から解放された楽しい明るい日々を過ごしていただきたいと存じます。

1. 異常出血または異常排泄。
2. 乳や他の部分のしこりや軽い痛み。
3. 回復しない炎症。
4. 排便排尿の習慣の変化。
5. 声のかすれ、または咳。
6. 消化不良または嚥下困難。
7. いぼや、ほくろの変化。

なお今後とも当協会発展のため格別のご協力とご援助を賜われますようお願い申し上げ、「目でみるWHO」第3号発行のあいさつに代えさせていただきます。

WHOと紋章



WHO（世界保健機関）とは、国連の仕事のうち、保健衛生の分野を受け持つ専門機関でWorld Health Organizationの頭文字をとって、WHO（ダブルユー・エイチ・オー）と呼んでいる。

その目的は全人類の健康を守るために、世界の国々が力をあわせ努力しようとするものである。

なおWHOの紋章は、国連紋章の中央に医術の神といわれるヘビとギリシャの医神イスキュレピアスの杖を配したものである。

万国博に“健康の広場”——

「太陽の顔」もキラキラと

日本万国博のシンボル“太陽の顔”の笑うお祭り広場に、ピチピチとした世界の健康児たちが集まってくる。「すべての人民の健康は世界の平和と安全を達成する基礎である」—WHO憲章前文—万国博は世界を一つにした健康の広場だ。健康は肉体的美と精神の美を表象する。

WHOは、この万国博に健康福祉館を建設する予定であったが、国連館の内容充実に協力するため最初の計画を中止し、国連館の未来の部—世界セクションにWHOのエッセンスを展示することになった。小さいながら人類の健康を守るWHO精神のとしびは、ここでも高くかがやいている。

《写真はお祭り広場に集まる世界の健康児たち》



すべての人民の健康は世界の平和と安全を達成する基礎である (WHO憲章前文)



国境・人種を越えて…



EXPO'70 広場に集まる世界の娘たち

《写真は、モミの大木でつくられた日本万国博会場内ブリティッシュ・コロンビア州館屋上につどう万国の娘たち。朝日新聞社撮影》



健康の 維持・増進

オンコセルカ症（回旋糸状虫寄生により宿主が失明することのある病気）撲滅運動中のアフリカのある村で目の検査が行なわれている。トラコーマも多く国の経済に影を投げかけている。

WHOはこんな仕事をしています

保健衛生 情報の交換

WHOが行なっている事業には、いろいろのものがあるが、それらはWHOの本部事務局もしくは地区事務局を通じ各国との国際的協力の下に実施されている。

まず第一に国際間の伝染病対策であり、全世界にわたる無線放送網を利用して世界の保健衛生情報を集め、各国政府に対し、疾病を防ぐための情報を提供している。





人びとの疾病を予防し治療するために、重要医薬品について、その純度と効能との国際的基準を定め、現在、ペニシリン、ストレプトマイシン、ビタミン類、ワクチン類などの生物学的製剤の国際的基準を定め、また世界各国に共通して用いられる最初の国際的薬局方も完成している。

医薬品の基準 を定める

衛生関係の 図書や資料 を出版する

WHOでは、統計や研究、報告に関する約20種の刊行物の出版、文献の目録や抜萃、英仏語以外の語による報告書の作成、研究論文等の翻訳についての便宜提供、その他内外からの問い合わせに応じて必要な資料を提供したり、回を行なっている。





保健衛生マンを 教育訓練する

仮に1人の医師が770人ずつ受けもつとしても、現在の世界人口からすれば、350万人の医師が不足している。これは恐るべき数字であるが、さらに世界人口が倍増してくれば、いったい、どうなるのだろう。

医師になるには、8～9年の日時を要する。医学教育については、常に将来性を念頭におかねばならない。

WHOは保健衛生マンの研修を行なうとともに、奨学金制度によって各国の若い技術者に海外研究の便を与えている。



母と子の 健康を守る

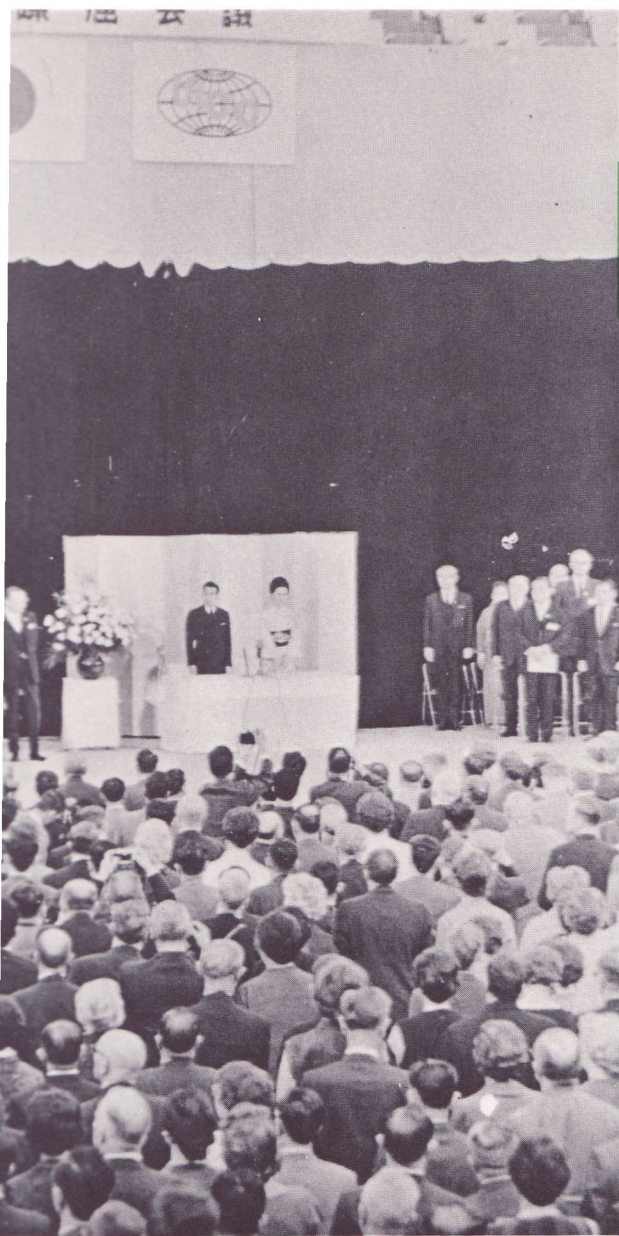
母と子とは、特別の保護と援助とを受ける権利を有すると世界人権宣言にうたわれているが、WHOでは、公衆衛生サービス部に母子衛生、看護、衛生教育などの部門を設け、世界の母と子の健康看護につとめている。



の不自由な子供たちのための授業。(スエデン)



医師の熱心な診療と指示、親の行きとどいた看護と愛情で、子の病気は完全に回復した。「先生ありがと……」と電話で医師と話し合う子の元気な言葉、母のうれしそうな表情。(東京都内築地のある家庭風景)



世界人類の悩み

みんなの力で征圧しよう

〃早期発見は生命を救う〃

WHOの今年の世界標語は“ガンの早期発見は生命を救う”というのである。これを受けて日本では“ガン検診受けて安心明るいくらし”の標語を掲げ、ガン征圧のために全国的に運動を行なっている。

世界のガンによる死亡件数は、1950～52年の217万5,000人から、1958～60年には262万3,000人と約20パーセント増加し、70年代を迎えても、ますます増加の傾向を示している。先進国ではガンは心臓血管疾患について死因の第二位を占め、わが国でも心臓、脳の疾患とともに死亡率の上位を占めているのはご承知の通りである。現在ガンに冒されている人（治療前・治療中・治療後のものを含めて）の数は、世界中で500万人を上まわる。

ガンの原因を究明するためにWHOは比較研究に着手した。たとえば、いろいろな点で似ているノルウェーとフィンランドが肺ガンの発生率では非常に異なるのはなぜか、を突きとめることもその一つである。WHOは1965年にフランスのリヨンに国際ガン研究機関を創設した。これはとくにガンの原因と流行状態に注意を向けるものである。

WHOはまた腫瘍を分類、研究するための世界的な国際照会センター網を設立した。

一方、わが国の胃ガン死亡数は昭和41年で109,708人、死亡率は人口10万対110.8で、死亡順位は脳卒中について第2位である。年齢階層別には35歳～59歳が第1位、部位別には胃ガンが4万7,000人で最高位である。胃ガンは欧米先進国ではすでに減少しており、現在では日本特有の現象のようである。子宮ガンも6,652人の死亡者を数えている。なお肺ガンによる死亡者は8,351人で、男の死亡率ではイギリスの9分の1、アメリカの4分の1程度で低位であるが昭和25年に比較すると数倍になっており、わが国も欧米諸国同様増加の傾向を示していることは注目しなければならない。なおガンによる死亡率の統計は昨年度までに依然増加し、ガンに対する予防、

ガンの早期発見は生命を救う”
ガン検診受けて安心明るいくらし”
まやガン征圧こそ、人類の健康
守り、健康を増進する最大の命
であり、世界人類の合い言葉で
る。

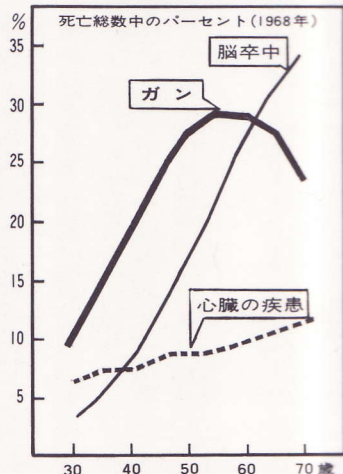
写真は第9回国際ガン会議の開
式であいさつをされる皇太子殿
、同妃殿下。東京日本武道館に
朝日新聞社撮影]



治療の決定打が発見されない現在、早期発見による早期処置以外に適切な対策はなく、人々の大いなる自覚が望まれている。

日本においても学会においてガンの病原、新薬剤対策など、いろいろ研究発表が行なわれており、ガン征圧の歩みが着々として進められているのはたのしい。いずれにしてもWHO標語のごとく、早期にガンの検診を受けることが急務である。

30歳以後の死亡原因



警告！ 7つの症状

ガン退治に映画スターも参加

アメリカ・ガン協会のバックボーン、その実体は、いわば義勇軍で、230万人を上回る各階層の人々が、アルバイト的な働きによってえた金を寄付している。有名な映画スターソフィア・ローレンも、ガンとのたたかいを支えている一人である。彼女のスチールとともに、ガンの前ぶれとなる7つの症状を掲出して、一般に警告している。

- 1. 異常出血または異常排泄。
- 2. 乳や他の部分のしこりや軽い痛み。
- 3. 回復しない炎症。
- 4. 排便、排尿の習慣の変化。
- 5. 声のかすれ、またはセキ。
- 6. 消化不良、または嚥下困難。
- 7. いぼや、ほくろの変化。

これらの症状が2週間以上続いたら一応医師と相談して下さい。何事も遅くはぬ先のツエが必要。

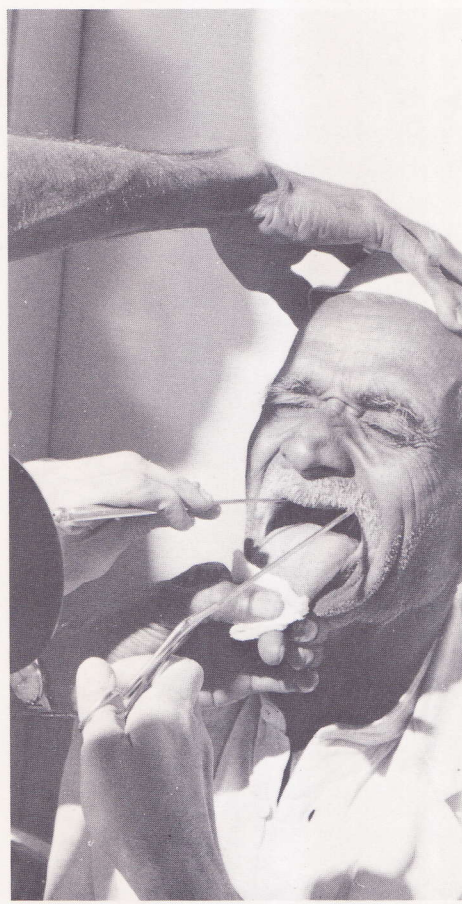


↑映画スター ソフィア・ローレン



近年、ガンに対する対策は急速な進歩をとげ、その診断治療は日々に進んでいる。現代的な外科手術、薬剤、X線およびその他の放射線が、それぞれに、あるいはいくつかに組み合わせられて、こうした疾病の治療法をどんどん変化させてきたのである。今や、ある種のガンでは完治が可能になり、またほとんどすべてのガンは、完治とまではいかないまでも、抑制することができるようになった。ガン治療は疾病が広がらないうちに早期発見することによって成功することが多い。

《写真はフランスにおけるガン手術》

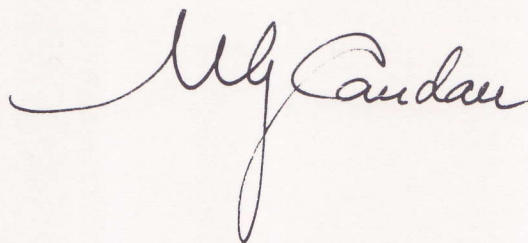


ボンベイの中心街パレル通りには焦げつくような太陽の真下にある。その歩道には点々と血のような赤い色をした斑点が散らばり、二、三歩ごとに赤茶色の斑点もついている。彼らは、きんま（こししょうの一種）のかたまりを一日中、口に含んで、つばをはきながら歩く習慣があるが、この斑点は、そのつばの跡である。きんまのかたまりは「パン」と呼ばれ、小さな店でも売っている。パンは安く、食欲を抑えると同時に、流涎をいちじるしくうながす働きがあるので、つばと一緒に道路にはき出される結果となるのである。しかし道路の汚点のみがパンの害ではない。研究者たちはパンがインドに多い口腔内ガンの原因ではないかといっている。

《写真はタタ記念病院での口腔内ガンの診察》

970年世界保健デーによせて

『ガン征圧は早期処置が第一』



WHO事務局長 M・G・カンドウ



ガンは世界のいたるところから、かなり犠牲者を連れ去っている。多くの国において、ガンは心臓血管疾患に次いで、実因の第2位をしめている。この病気に対しては、われわれは感情的にならざるをえない。ガンの問題は多くの人がさけたいというものの、ひとつであり、不治の病いだ信じている人も多い。そして、無知のためか、あるいは理由のない恐れのために、おくれになるまで診断を受けずにいて、くさんの人々が死んだり、むだに苦しんでいるのである。

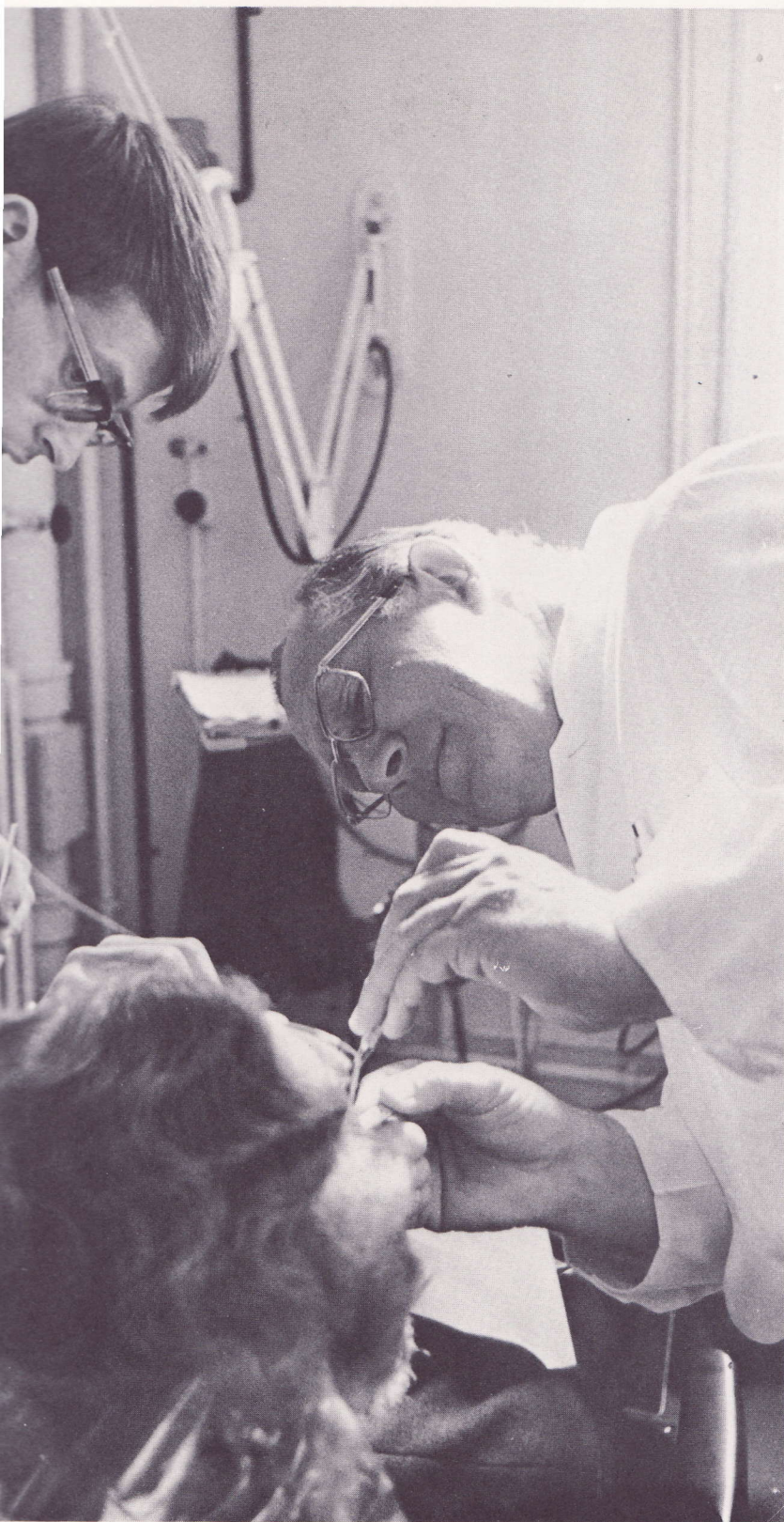
周知のように、ある種のガンの原因については、われわれは、その発病を予防することができる。たとえば、喫煙がおもな原因であるとされてきた肺ガンや、化学的な不や、その他の害が原因となっている工場業員のガンは発病を防ぐことができる。これまでにもガンの原因となる物質は多く明されてきたが、現在行なわれている国的、国際的な研究は、やがて、その他のガンの原因を究明して、ガンを抑え、人間まわりから閉め出してしまおうであろう。かしながら、現在はまだ多くのガンが予できないという事実を認めなければならぬ。したがって、できるだけ早期に、できるだけ完全に、ガン患者を治療すること

が現在できる最良の方法である。最近、ガン疾患との闘いには長足の進歩がなされ、その診断、治療は日々に進められている。現代的な外科手術、薬剤、X線や、その他の放射線が、単独に、あるいは、いくつかを組み合わせ用いられ、このような疾病の治療法を大きく変えてしまった。いまや、ある種の症例では、ガンの完治も可能となり、また、ほとんどすべてのガンは抑えることが、できるようになった。ガンの治療は、疾病が広がらないうちに早期発見することによって、成功することが多い。たとえば、皮膚ガンのほとんどすべて、また頸部ガンの80パーセント以上は早期の治療によって直すことができる。

外科医たちは、ガンの手術に高度に磨きあげられた技量をふるい、放射線技師は、ますます精密になっていく治療をしている。強力な薬の使用による、すばらしい効果も達成されつつあり、さらに重要な発見も、もうすぐそこにある。

ただ、残念なことに、ガン治療のためのかなりの施設が、必ずしも有効に使われてはいない。治療が早ければ早いほど、それだけ成功の可能性は多いのであるが、しかし、誤った考え方や、心得違いの態度、ガンの問題の普及がいたらないことなどのた

めに、ガンではないかと、うすうす感じている人までが、できるだけ早く医師の診察を受けることをしないでいる場合が多い。治療の問題は別としても、自分はガンだと誤って信じこんでいる患者は、ひとりで病気を苦にしたり、恐れたりしていないで医師の診断を求めたら、その心の負担は、おおかたなくなっていただろう。ガンの問題は、あまねく理解がゆきわたり、正面からとり組んで、はじめて早期発見、早期治療が原則となるのである。そしてまたガンについての、さまざまな事実が広く知られ、かつ信じられるようになって、はじめて喫煙のような有害な習慣に反対する運動が効果を生むのである。ガンに対する闘いは、勝利から、はるかに隔たっている。しかしながら早期発見、早期治療が広くゆきわたるようになれば、現在の知識だけでも、闘いは半ば成功といえるだろう。今年度の世界保健デーが、ガンに対する人々の態度をよりよいものにし、現在、われわれのなしているガン予防法の知識を、より広めることに貢献できれば、多くのむだな苦しみはなくなり、数多くの生命が死を免がれることであろう。



この写真はコペンハーゲンにある Histopathology of Odontogenic Tumors の WHO 国際資料センター局長 J.J. ピンドボルグ教授（同教授は、またコペンハーゲンにある王立歯科大学のガン対策科科长とリッグズ大学病院歯科科長も兼任）でいずれも oral precancerous conditions（口内前ガン症状）の発見に努め、とくにリッグズ大学病院歯科では、一日に35人から45人の患者が無料で診察を受けている。



「難病のガンも、早期検診で征圧されます」「一日も早く、いや速刻、ガンの検診を受けましょう」と、お嬢さん方まで道行く人に訴えている。（東京有楽町にて。朝日新聞社撮影）



戦 禍

日本は世界最初の
原爆被災国
である

ヒロシマが原子爆弾を受けて二十五年、いまでは立派に立ちあがった。しかし、心の痛みは消えやらず、毎年の原爆記念日には記念塔の前に何千、何万の人が集まり、犠牲者の霊に香華を手向けている。原爆患者もまだ残っている。写真はあの日の四日後、ひん死の少女に水を与えて介抱する市民。真剣な、そして自然にほとばしり出た助け合い精神である。これは地球にみなぎる共通の尊い精神でありたい。〔写真は被爆後の広島市内で。朝日新聞社撮影〕

健康の増進と疾病、とくに伝染病の抑制が諸国間において不均等に発達することは、
共通の危険である。

《WHO憲章前文より》

戦禍のチマタと化したサイゴン（南ベトナム）で、傷つき倒れた市民の手当てをする日本人医師。同じく内乱の悲惨な戦禍をこうむり、飢えと病気と医療機関の手不足に悩むビアフラ（アフリカ）にも、この三月日赤から医師、看護婦ら4人の救療班が急派された。
〔写真はサイゴン市内にて。朝日新聞社特派員撮影〕





むしばまれゆく 青少年問題対策

青少年対策は世界共通の問題である。大学生の過激な反体制運動などは別として、アメリカではヒッピー族の凶悪な犯罪がひん発しているし、犯罪にいたらないまでもセックス刺激、スピード、麻薬を求めて、いたるところで物議をかもしている。とくに服装や髪かたちの点では別世界の人種かと思われるようなものも少なくない。青少年と性病、妊娠中絶の問題、また麻薬中毒のことを考えるのも決してムダではあるまい。とにかく、70年代は青少年と、その肉体的、精神的“保健衛生”を考察しなければならなくなった。

の写真は、顔にピース、ラ
などの文字をかき、ひたい
バンソー膏のようなものを
って得々としている少女。
はヒッピー族まがいの男女
少年の群れ。

